

常任委員会視察報告書

委員会名	教育福祉常任委員会 (吉岡和江委員長、前川綾子副委員長、後藤吾郎委員、志田一宏委員、井上三華子委員、納所輝次委員)
視察先 調査事項 など	1 図書館施設について (オーテピア高知図書館) ・令和6年(2024年)10月31日(木)13時15分～15時15分 ・説明課：高知市教育委員会事務局 図書館・科学館課 2 文化財の保存・活用について (岡山市埋蔵文化財センター) ・令和6年(2024年)11月1日(金)13時20分～14時35分 ・説明課：岡山市教育委員会事務局 生涯学習部文化財課
視察先 概況	1 オーテピア高知図書館の概況 オーテピア高知図書館は、老朽化・狭隘化した高知県立図書館と高知市立市民図書館を合築により整備したもので、平成22年8月に高知県知事と高知市長が基本構想の着手に合意したことから始まり、平成30年7月に開館しました。当該図書館は、オーテピア高知図書館、オーテピア高知声と点字の図書館、高知みらい科学館が入る複合施設であり、相互に連携を図ることで様々な人々の交流を深め、高知県内の生涯学習や文化の発展、中心市街地の活性化に寄与することをコンセプトとしています。 当委員会では、オーテピア高知図書館について、視察を行いました。 2 岡山市埋蔵文化財センターの概況 岡山市は、全国的に見ても旧石器時代から近現代に至るまで非常に多くの貴重な埋蔵文化財(遺跡)が存在している地域ですが、開発事業も多く、それらとの調整を図りながら埋蔵文化財の保護・保存を行ってきました。 岡山市埋蔵文化財センターは、これらの岡山市の埋蔵文化財保護に関する拠点施設として、発掘調査の実施や出土物の整理・保存・収蔵のほか、展示・公開・情報発信を行い、埋蔵文化財の保護や保存、愛護意識の普及を図るため、平成12年4月に開館した施設です。 当委員会では、岡山市埋蔵文化財センターについて、視察を行いました。

1 図書館施設について (オーテピア高知図書館)

10月31日 オーテピア高知図書館、オーテピア高知声と点字の図書館、高知みらい科学館の3つの施設からなる複合施設です。しかも県と高知市の共同による建設、共同運営をしています。全国初めての取り組みとのこと。

県と市の合築、共同運営という点で話し合いを重ねてきました。今も週1回の管理職会議等論議しながら運営し、県、高知市職員が一緒に働いています。

下記写真は高知図書館前にて。



バリアフリーを大事にし、高齢者や障害当事者の意見も聞き、取り組んだとのこと。エスカレーターの運転速度も高齢者等に合うようにしています。

点字本、拡大本 録音本等障害者に沿った本をそろえていました。

対応していただいた職員はすべて女性。女性の活躍はうれしい！

レファレンス業務を始め、図書館の根幹に関わる業務は司書を中心とした高い能力を有する職員でなければならない。専門職を確保するとともに、直営を堅持することを基本として運営しているとのこと。

県内唯一の点字図書館として、読書が困難な人が読めるように工夫された様々なバリアフリー図書を用意、朗読ボランティア等の育成をしています。鎌倉市も老朽化した図書館の建て替えの課題がある。喫茶室等は近隣にあるので入れず、図書館等機能を配置。鎌倉も学ぶべきと思いました。

吉岡和江
委員長
所感

2 埋蔵文化財の保存・活用について（岡山市埋蔵文化財センター）

11月1日 岡山市には旧石器時代から近現代迄多くの埋蔵文化財＝遺跡が存在しているとのことです。

埋蔵文化センターでは主に吉備国の埋蔵文化財の研究、展示をしています。

写真は岡山埋蔵文化センター前にて



建物は古墳群、古墳文化 古墳をイメージしています。

発掘調査は直営で行っており、文化財課 専門家6名、会計年度職員3名、事務職1名で運営しています。

たくさんの遺物の保管管理もなかなか大変で、また、埴輪が多く出土され、将来は埴輪が文化財になるのではとのことでした。

建設に至る経過は、歴史系博物館がないということで、建設計画ができたが、駅前開発との関係でデジタルミュージアムが先行し、その後、平成12年に建設されました。

沖積地に遺跡が多い地域で、深い場所に遺跡が多いことから、鎌倉市と比べて発掘調査は少ないようです。

文化財の種類も多い、時代別調査、集積地のいろいろな遺跡に対応する必要もあり、力量が問われるとのことです。

最近では文化財と観光とリンクされていることが多くなっており、文化財とのバランスが問われているとのことでした。

運営費は年間2000万円規模ですが、修繕計画が作られていないことは課題で、大規模改修は今のままでは無理、修繕費も不足しています。蛍光灯をLED化することは今のままでは無理とのことでした。

文化財センターは調査保存、記録保存、適切な保管管理が使命ですが、遺物管理の人材の確保も財政をどう確保するか、課題があると思いました。

職業体験として2人の中学生が待っていました。未来を担う世代が歴史を受け継ぐ人になってほしい。埋蔵文化財に関心をもっていることに明るい未来を感じました。

専門家として熱い思いが伝わる説明を聞き、もっと聞きたかった！古墳の見学にも行きたかったです。

1 図書館施設について（オーテピア高知図書館）

平成30年7月に開館するまでに8年の歳月を必要としたという全国でも3例程しかない県と市で運営する図書館です。県と市というそもそも文化の違う行政同士が連携するという困難さの上に、高知という土地柄は、南海トラフ地震の対策として、耐震天井の見直しや免振装置の見直し等を計画することに時間を要したということは、非常にうなづけるものでした。開館後は、情報共有を重視し県市の会議を定期的に行き、また、館内は県と市の図書館の2館と『オーテピア声と点字の図書館』、『オーテピアみらい科学館』の4館の複合施設ですので、その連携会議を行うことで調整しているということです。また、防災については、3,000食の備蓄倉庫が完備されていました。

建物の外側はコンクリートの固いイメージですが、館内に入ると木材が多く使われており、高知は木が豊富な市なので、館全体を木と想定して本棚等には沢山の木のデザインが施されており、温かな雰囲気を作っていました。収納能力は約205万冊で、国内では非常に規模の大きな図書館であることがわかります。

点字図書館があることは、非常に活気的であり、そのための機械や人の配置に気を配られていることがわかり、他に例をみない特徴と言っても良いと思います。

今後の課題は、市内の学校図書館との連携である、と館長がお話されていたのが印象的でした。

2 埋蔵文化財の保存・活用について（岡山市埋蔵文化財センター）

センターで安川満所長に、岡山の埋蔵文化財についてお話を伺ってから、実際にセンター内を案内して頂きましたが、次々に目に入ってくる発掘された埴輪の数々は、これまで見たことのない様な形、その一つ一つの大きさに驚きました。家の形や円筒形の物など、どれも大きなものばかり。5世紀頃の豪族の墓、造山古墳群の説明では、『吉備真備』など、学生時代に歴史の教科書で習った記憶のある名前が次々と表れ、豪族の生活や当時の人々の力関係などを想像しながらワクワクして聞きました。

安川所長は、埴輪の研究者であり、特に詳しく、流れるように熱く語る古墳や発掘についての話は、ついつい引き込まれるものがありました。時間がなくて残念でしたが、岡山市内に大変多いのが特徴という古墳を是非見学したいという思いが残りました。

発掘は直営で行っているということも特徴の一つでした。

今後の課題として、こうした埋蔵文化財を調査研究する担い手が不足していることから、育成していかななくてはならないということで、そのためには、その他のこの分野に関する改善は、今のうちにしておかななくてはいけないと考えている、という所長の言葉は大変印象に残りました。

是非、機会があれば、岡山市内の古墳群を視察させて頂きたいと思いました。

前川綾子
副委員長
所 感

1 図書館施設について（オーテピア高知図書館）

自身が希望を出した視察先であった。希望理由は1. 本施設が高知市と高知県の合築、すなわち官官連携により作られたこと2. 鎌倉市においては中央図書館をはじめとする公共施設見直しを迎える時期であることの2点であった。まず現地に着いてからの第1印象は小学校跡地を利用した5階建ての立派な建物であった。地場産材を多く用いた施設内はとても心が落ち着く。またユニバーサルデザインが踏襲されていた。通常の図書館機能に加えて、視覚・聴覚をはじめとする障がい者の為の「声と点字の図書館」、高知みらい科学館、ホール、学習室、静寂読書室、研究個室など多くの機能を備えている。施設の名前に含まれるピア（仲間、多くの仲間が集える場）をまさしく体現した場所と言えよう。平日昼間の訪問であったが老若男女が集う。駅から近い訳でもない。また緊急避難場所（津波避難ビル）としての機能が備わっており、県民・市民にとって平時は居場所、有事は安全な場所として、鎌倉市においても積極的に取り入れたい要素が包含されていた。高知市と高知県が喧々諤々の議論の末に作ったこの施設、同規模のものを鎌倉市に取り入れるのは現実的ではないが、人が集まる居場所としての機能や緊急避難場所としての機能は参考になるものであり、その上で多くの図書館機能を持つ本施設は最終的に市民の生涯学習や文化の発展に寄与するのだと感じた。

後藤 吾郎
委員
所 感

2 埋蔵文化財の保存・活用について（岡山市埋蔵文化財センター）

岡山駅からバスで20～30分ほどかかったであろうか、埋蔵文化財保護の拠点施設である本施設。岡山市内の埋蔵文化財の調査や出土品の整理保存をしているとの事。2000年に開設した本施設は3階建て、1階にほとんどの機能が備わっており、2、3階はほぼ収蔵庫という造りであった。1階には展示室をはじめ、鉄器処理室、木器処理室、水洗室、遺物整理室、収蔵展示室などがあり、実際に作業されている現場も拝見することが出来た。5世紀前半に築造された国史跡「造山古墳」や同じく市内に存在する「金蔵山古墳」からの出土品の数々が陳列されている。多くの埴輪が収蔵展示室に置かれていたのが印象的。先に挙げた古墳を調査してゆくと、古墳に使われている石自体が九州産であること（その時代にどうやって九州から岡山へ運んだのか）や、例えば父、息子、孫などの血縁関係にあるものがそれぞれの古墳に入っている、それぞれの配偶者は入っていないことなどが判っているらしい。考古学とは改めて興味深い学問であることを再認識した。鎌倉市においても多くの史跡・埋蔵文化財包蔵地が存在するため、その保存・活用について再考する良い機会となった。国内外から多くの方々が来られる本市において、また人口減少社会である現代において計画的かつ持続可能な埋蔵文化財の保存・活用の在り方を提案出来るよう引き続き勉強してゆきたいと感じた。

1 図書館施設について（オーテピア高知図書館）

全世代の様々な人々が集う交流の場、情報発信拠点をコンセプトに建設された図書館等複合施設「オーテピア」を視察した。この施設は、高知市立追手前小学校が平成 25 年 3 月に閉校した跡地に、老朽化等の理由で高知県立図書館と高知市立市民図書館（鎌倉市でいう中央図書館）を合築により整備した。高知市から高知県に図書館の合築を提案したのは平成 20 年 1 月のこと。まだ、追手前小学校では児童が学んでいる中でのことである。その後も、高知県と高知市は協議を重ね、スケジュール通り小学校も閉校され、平成 30 年 7 月に県立図書館、市民図書館、高知みらい科学館、声と点字の図書館 4 館を効率的に配置した複合施設とし開館した。開館後も直営を維持し、それぞれの機能を十分に発揮しながら相互に連携を図ることで様々な人々の交流を深め、高知県内の生涯学習や文化の発展に寄与し、開館後約 5 年 8 か月で来館者は 500 万人を達成している。施設内は、1 階に声と点字の図書館があり、2 階から 4 階に全国初の取組である高知県立図書館と高知市民図書館がある。貸し出される本には、赤色と青色で管理された本が並び、県資産と市資産が本棚に入り混じっている。視察時、説明してくれた職員の方は高知市の職員であったが、公共施設は運営側の物ではなく、利用者からみれば県も市も関係ない。と話があった。県、市という行政の形にとらわれない姿に感銘した。一つ残念なのは、少子化で小学校が閉校した跡地ということである。

2 埋蔵文化財の保存・活用について（岡山市埋蔵文化財センター）

岡山市の埋蔵文化財保護に関する拠点施設「岡山市埋蔵文化財センター」を視察した。平成 12 年 4 月 1 日に開館された本施設は、旧石器時代から近現代にいたるまで非常に多くの埋蔵文化財＝遺跡を発掘調査などで出土したものを収蔵し、展示公開している。展示では、時代順に代表的な出土品を並べ、考古学から岡山の歴史がたどれるようにされている。また、企画、速報展示コーナーでは最新の発掘調査成果やニュースで話題の遺跡や遺物を紹介する努力をしている。公開、普及事業では、見学者の安全や集合場所の確保が困難などの特別の事情がない限り、ほぼ全ての調査で開催されている。調査地内に入り、遺跡を間近で見ることができる機会であり、毎回多くの参加者を迎えているとのことであり、令和 3 年度には 3 回実施され計 750 名の参加と令和 3 年度のセンター来館者（749 名）とほぼ同数であった。岡山市で初めて国史跡に指定された彦崎貝塚（H20. 3. 28 指定）を普及活用しようと力を入れ、親子体験教室、歴史講座、企画展、出前講座、研究調査、考古資料の展示貸出し等を行い至るところで普及活動に努めている。視察時、市内中学生が職場体験の打ち合わせで来館していた。新型コロナウイルス流行時には、中止していたとのことだが、学習者主体の学びで、郷土の歴史や文化を学び、子や孫に継承して行ってほしい。と切に願っている。

志田 一宏
委員
所 感

1 図書館施設について（オーテピア高知図書館）

「すべての人を本の世界へ」この言葉が体現された複合施設「オーテピア」は、施設としての機能やデザイン、最新の耐震構造と防災装備、バリアフリー設備などのハード面においても、関わっている人材や施設のあり方・利用者への配慮などのソフト面においても全てが完璧な施設であり、実りのある視察となりました。視察前夜にオーテピアの「新図書館基本構想」や「新図書館等複合施設整備基本計画」などを読んで改めて質問したいことが沢山ありましたが、準備された沢山の資料と要点をとらえた実際の説明と見学を通して、利用者中心に多くの議論を十分に重ねて作られた施設だということを感じられる思いのこもった施設であることにとっても感動しました。多世代の方が利用したいと思えるこのような施設が鎌倉市だけでなく次世代において求められているのではないかと、日本全体の老朽化問題と防災対策の共通の課題を強く感じました。

オーテピアは全世代の様々な人々が集う交流の場・情報発信拠点として「オーテピア高知図書館」（県立図書館と市民図書館本館の合築）「オーテピア高知 声と点字の図書館」「高知みらい科学館」の4館の施設からなる複合施設であり、震災対策のため計画から開館まで8年を要し2018年に開館しました。全国で初となる県市合築の図書館は県市の異なる機能を相互に補完し共通する部分で行っています。また高い能力を持つ専門職を確保するためオーテピアは直営での運営を堅持しているということが大きなポイントで、市の6分館15分室ともネットワークで連携しています。オーテピア図書館では、健康・安心・防災情報デスク、ビジネス支援デスク、高知資料デスク、視聴覚カウンター、子どもカウンター、調べもの案内（レファレンス）デスク、総合カウンターと7つの窓口があり、ティーンズサービス、多文化サービス、視聴ブース、研究個室、静寂読書室、グループ活動のできるグループ室、貸し施設など、これからの高知を生きる人たちに力と喜びをもたらす図書館として、サポートや支援が多岐に渡っています。特に「声と点字の図書館」には障害・高齢・病気などで活字図書での読書が困難な方のためのバリアフリー図書の閲覧スペース、視覚障害者向け機器の展示コーナーだけでなく、ボランティアスペースがとても充実しており、対面音訳室や録音室、編集室、校正室が実際に障害のある利用者や、支えるボランティアの方も多いいことを実際に感じました。鎌倉市も老朽化が進み、災害においても懸念がある中で、新たな公共施設再編においては様々な意見がある中で今後の大きな課題であると感じていますが、オーテピア図書館のような施設はすべての多様な人々にとって最も求められており防災機能やユニバーサルな視点を取り入れたすべての人が利用できるという視点は参考になる部分は多くあると感じました。

井上三華子
委員
所感

2 埋蔵文化財の保存・活用について（岡山市埋蔵文化財センター）

2日目は昨日から待ち構えていた秋雨がとうとう降りはじめた中での急足の視察となりました。素晴らしいセンターの外観を足速で通り過ぎ、初めてみる様々な種類の埴輪と埴輪に対する館長の思いに感動し、終始 時間に縛られた中での見学で名残惜しい思いで鎌倉へと帰路につきました。

岡山市埋蔵文化センターは岡山市教育委員会文化財課に属する埋蔵文化財保護施設として、発掘調査や出土遺物の整理と収蔵・保管、収蔵品の公開や教育普及活動を行っています。館内には狩猟採集の時代から稲作がはじまり、古墳や古代の寺院や村の生活、岡山城の築城に至るまでの1万年以上に及ぶ岡山の歴史をたどる遺跡の出土品が展示されています。

また、展示室の他にも木器処理室や鉄器処理室、水洗室や遺物整理室を見せていただき、その緻密な作業に驚きました。文化財を正しく保存するということは守り伝えてきた人たちの歴史を守っていくという責任の大きさや、多くの知識と緻密な技術も必要とする、とてもやりがいのある仕事であると感じました。

中学生が出前授業の事前の打ち合わせで訪れていました。未来を担う子どもたちがそういった地域の歴史や文化を実際に見て学ぶことはとても貴重で、受け継いでいくことの必要性を感じました。何よりも壮大なロマンは私たちの暮らしや心を豊かにしてくれるものだと感じました。

1 図書館施設について（オーテピア高知図書館）

図書館等複合施設「オーテピア」は、老朽化・狭隘化した高知県立図書館と高知市立市民図書館（本館）を合築により平成 30 年 7 月に旧市立追手前小学校跡地に整備され、同時に旧市立高知点字図書館と旧高知市立子ども科学図書館も、オーテピア高知声と展示の図書館・高知みらい科学館として複合施設に整備されたという。

図書館を県と市で共同運営するという全国初の取り組みは計画段階から様々な議論があったようだが、その結果、整備から運営、維持管理に至るまで業務の棲み分けと共同運営を明確化されている。

施設や運営のあり方がサービスの方法、世代別の対応、バリアフリー、静寂の確保、休憩の取り方など、様々な利用者を想定して設計、運用されており、かなり高いレベルで要望に対応できるだけの環境を整えていた。

これは旧小学校跡地という立地の優位性と、県と市が共同で整備するからこそ実現できたものであると思うが、サービスの考え方やあり方は鎌倉市にとって大いに参考すべき事例である。

市が単独で整備する方法もあるが、共同事業として県や民間事業者などの参入も視野に入れて検討する際に、一つのモデルケースとして参考になるとの感想を持った。

納所 輝次
委員
所 感

2 埋蔵文化財の保存・活用について（岡山市埋蔵文化財センター）

吉備国の中枢を占め、全国的にも貴重な遺跡が集中する岡山市の埋蔵文化財センターは岡山市教育委員会文化財課に属する施設で平成 10 年度に文化庁の補助事業により、総事業費 7 億 7 千万円をかけて平成 11 年度に整備された。岡山市の埋蔵文化財の調査、保護の拠点施設である。鉄筋コンクリート 3 階建の建物で、外観は吉備津神社随神門と国宝の本殿をイメージし、外壁には装飾古墳として有名な岡山市千足の千足古墳石障の直弧紋を表現したという。内部は公開スペース・作業スペース・事務スペース・研究スペース・収納スペースに分かれている。主な業務は開発事業等との協議・調整と確認・試掘調査、発掘調査などを行い、出土遺物の洗浄、復元、実測など整理と資料化、出土遺物・調査記録などの収蔵、保管、収蔵品の展示・公開、現地説明会などの開催、分布調査と遺跡台帳の整備を行うという。

企画・速報展示コーナーでは最近の調査で出土したものや、話題の遺跡、出土物も紹介しており、常設展示コーナーでは旧石器時代から近世までの岡山市の歴史を出土品、考古学から紹介している。

埴輪の収蔵と展示が圧巻で、埴輪の研究は国内においてもかなり高いレベルで進められている様子。ただし、このセンターの規模で岡山市の埋蔵文化財の調査、保護、管理、開発の調整を市直営ですべて行うには人員が不足しているとの感想を持った。